

バカとテストと、もう
一人のアキ

一門

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

吉井明久は退屈な日々を送っていた。ある日、不思議な本を拾う。その本で文月学園がある世界の吉井明久と一つになってしまう。吉井明久の二人三脚な学園生活が始まる。

初投稿なので、お見苦しい点があると思いますが、よろしく願います。

目次

プロローグ	1
プロローグ 2	5

プロローグ

《???
side》

ここは文月学園が無い世界。

「今日も一日終わったか」

そこには、一人、気だるそうに男が帰宅している。

「なんか、つまんねえ」

男は文武両道を目指し頑張ってきたが、いつの頃からか心には何か物足りないを感じ、

手を抜くという行動をしていた。その為、男は一番にはなれなかった。

物足りないな、俺の人生こんなでいいのかと最近、何時も感じていた。

面白いことが起きないかなと思いつながら歩くと

「んっ?」

道路に黒い本が落ちており、少し興味を持ち、手にした。

そこには「もう一つの人生」とタイトルが書かれていた。

さらに軽く読んでみる。

「ふむふむ……これを手に入れた人は今までの自分とオサラバ出来るって、なんか胡散臭いな」

胡散臭さを感じるも俺は僅かな期待を持ち、早々に帰宅した。

家に帰り、服を着替え、早速本を読んでみる。

(これが本当ならば、この俺の人生も面白いことになるのか?)

期待を込めて目をおす。

「読めば、読むほど、怪しいな」

一ページずつ、めくっていくも、よく分からない文字が書かれており、

正直意味が分からなかった。

ただ一行だけ日本語で書かれた。

へこの本の効果を発動させるには本に自分の名前を自分で記入してください。へ

「意外に簡単なんだな……」

はつきりいって怪しき抜群じゃばいか、書こう悩む。

まあ、こんな事で俺の人生が変わる訳ないかと思ひ、名前を

書くページを開いたまま天井を見上た。

「でも、試してみるか」

どうせ、占いみたいなものだと気軽に考え、

俺は自分の名前を書く。

この時、まさか本当に期待していたとはいえ本の通りになると思ってもいなかった。すると本に文字が浮かび上がる

〈では、今の貴方の違う人生を楽しんで下さい。〉

「これは・・・」

〈舞台は文月学園、もう一人の貴方は、ここで学園生活を送ってます。〉

「文月学園聞いたことないな」

〈ここで二人協力して頑張ってください。〉

「二人？・・・どういう事だ？」

〈因みに戻る方法は、もう一つの世界のAクラスを学園生活中に試験召喚戦争で

勝つことです。〉

Aクラス？試験召喚戦争？聞いた事がない単語で出てくる。

〈あとは、説明が面倒なので省略します。〉

「いやいや、結構大事な所だろ、ちゃんと説明しろよ！」

〈では、楽しんでください。〉

「おい、待て！」

本にツツコミをいれるという、あまり経験がないことしている最中、

いきなり俺の目の前が真っ暗になり、気を失っていった。

本に書かれた名は〈吉井明久〉

この作品の主人公である。

プロローグ2

明久side

「今日のDクラスとの試召戦争は疲れたよ」

僕、吉井明久は雄二に騙されて、島田さんには折檻され身も心もボロボロだよ。

「なんで僕がこんなめに・・・」

家に帰り着くとソファーもたれかかり一休みする。

すると一瞬目眩がおきる。相当疲れているのかなと思っていると

「おいっ!」

「えっ? 誰!」

周りを見ると誰もいない。それはそうだよ、僕は今、一人暮らし中なんだから。

もし、いるなら泥棒か幽霊だよ。と考えると冷や汗が出てきた。

「おいっ!」

「誰だよ! いるなら出てきてよ、お願いします!」

もう一度周りを見渡すが誰もいない。

「俺はお前の中から声を出している。」

「僕の中?・・・はっ!まさか、僕の隠れていた能力が今開花し、もう一人の僕が生まれたとか」

「はあく。まあいいよ、それで」

「で、なにかな」

「取り敢えず、お互いに自己紹介しようぜ。俺の名前は吉井明久だ」

「へへ、僕も吉井明久だよ」

「やっぱり、そうか」

「やっぱりって?」

「いや、何でもない。それより明久の事を教えてくれないかな」

「オツケー」

それから僕は色々なこと話した。文月学園やオカルトと科学が偶然により

完成した試験召喚システム、テストの点数に応じた強さを持つ召喚獣、また召喚獣を使つてクラスの設定を変える試験召喚戦争。

そしてFクラスのことやクラスメイトの雄二、秀吉、ムッツリーニ、姫路さん、島田さん

について説明した。所々、質問が出され、僕の分かる範囲で答えた。

はつきり言つて、周りからは一人で質疑応答しているようにみえるだろう、家の中

良かった。

「すまなかつたな、長々話してくれて」

「気にしないでよ、僕が好きで話したんだから」

「ところで、俺の名前を変えていいか」

「なんで？」

「今後、同じ明久が区別が付きにくいだろう。だから俺のことは明人（あきと）と

言ってくれ、今思い付いた名だ」

「分かったよ、よろしくね明人」

「よろしくな、明久」

「明久、話は変わるが、もしかして姫路さんと島田さんが好きなのか」

「なななにあって、いるのさ明人」

「判りやすい。反応だな、今俺はお前の中にいるだけ。お前の考えていることは解るんだぜ」

「僕の中、悪魔いるよ！」

「悪魔になるか、天使になるか、俺の気分しだいだ」

「うっ」

「因みにこんな事も出来る」

そういうと、僕の身体が勝手に動き出した。

「どうなっているの」

「簡単にいうと、俺と明久の立場が変わったんだ」

「僕の身体を返して」

「違うぞ、今表に出ているのは俺の身体だ」

明人が言うには、この身体には僕の身体と明人の身体の二つ身体が合わさっているらしく

僕が表に出ている時は、僕の身体で明人が表出ている時は明人の身体だそうだ。

まあ、僕は頭がこんがらがって途中で考えることを諦めている。

「明久、では戻すぞ」

「あつ、動く」

「明日から共同生活頼むぜ」

今日から僕と明人の奇妙な生活が始まった。

明人 side

(俺の世界には無かったものが色々あるみたいだな)

明久の話を聞いて俺は笑みが止まらなかつた。こんな、面白いことがあるとは思わなかつた。

からと明久の中にいて明久が自分と違つて良くも悪くもバカだつたことが分かつた。本当に俺の居た世界とは違うようだな。本の通りになるとは。

それにいきなり、明久の身体の中に入るとは。

(あれがもう一人の俺か)

はつきり、これ程明久と性格等に差があると思わなかつた。だからこそ、いきなり出てきた

俺の話に耳を傾けて信用してくれたと思う。俺ではこうはならない。

まだ、こつちに来て僅かだ。不安が無いといえば嘘になるが、こつちの方が俺が満足出来る

ような気がしてならなかつた。